



山伏の地方史

—群馬の修験道—

久保康顕・佐藤喜久一郎・時枝 務 著

みやま文庫

まえがき

皆さんは、山伏に対して、どのようなイメージをおもちであろうか。

おそらく、大部分の方は、歌舞伎の勧進帳に出てくる弁慶の姿を思い浮かべるのではないだろうか。

頭襟^{とぎん}を被り、結袈裟^{ゆいげさ}を纏い、法螺貝を吹き鳴らす不可思議な宗教家。あるいはでかい態度で法螺を吹く男。勧進帳のイメージでさえ、人によって区々であろう。

現在、群馬県では、山伏は必ずしも身近な存在ではない。大峰山を擁する奈良県、聖護院や醍醐寺三宝院が所在する京都府、羽黒山のお膝元の山形県などでは、現在も山伏をごく普通に見かけることができる。

そうした修験道の霊山をもたない群馬県には、もともと山伏があまりいなかったのではないかと思われるかもしれないが、明治政府が神仏分離政策を断行する以前には、現在の群馬県域にも大勢の山伏がいたのである。

ところが、一連の神仏分離令に引き続き、明治五年（一八七二）には修験道廃止令が出され、山伏は法律で禁止された。そのため、多くの山伏が神職に転じ、それまでの仏式の作法を神道式

に改めて、以後は神職として活動をおこなった。また、修験道廃止令を契機に帰農した者、天台宗や真言宗の僧侶になった者などもおり、山伏の末路は区々であった。

山伏が信奉していた修験道は、山岳修行で得た験力で、里での宗教活動をおこなう宗教で、神仏とともに祀るものであった。山伏は、蔵王権現のような神と仏が融合した「権現」を生み出し、仏教的な作法で供養した。復古神道を理想とした明治政府にとって、なんとも忌まわしい存在と目され、廃止の憂き目に遭ったのである。

しかし、視点を換えれば、修験道も神道同様に日本の自然のなかから生み出された宗教であり、神仏を区分けしない寛容な態度は、まさに日本の宗教としての個性を発揮しているものといえるかもしれない。

かつて、この群馬県の地で息づいていた修験道の歴史を振り返ることは、前近代に生きた人々の宗教のあり方を知るのみでなく、彼らが抱いていた世界観や自然観に迫ることに通じるはずである。

本書では、失われた山伏の宗教・修験道の実態を、群馬県の地域社会のなかに探ることで、地域民衆の生活世界の一端を解明したいと思う。

目次

まえがき

序章 山伏の宗教・修験道

1	山岳信仰と修験道	三
2	修験道の教団	九
3	里修験と呼ばれる山伏	一六

第一章 中世の修験道

1	群馬の山岳信仰と修験道	三三
2	熊野先達の活動	三二
3	道興准后の廻国	四四
4	戦乱の時代と山伏	五一
5	中世から近世へ	六三

第二章 江戸時代の山伏

1	本山派と当山派	七三
2	山伏の生活	九四
3	山伏と地域社会	二六

第三章 近現代の修験道

1	神仏分離	四三
2	近代化と地方修験の動向	四五
3	現代の修験道	五〇

第四章 群馬のおもな修験道寺院

1	西毛	五九
2	北毛	六八
3	中毛	七七
4	東毛	八六

終章 修験道の伝統

1	民衆宗教と修験道	一九七
2	民俗文化の源流	二〇九

あとがき

参考文献

著者紹介